

帰ったあとに従事しなければならない発掘調査に関する実地研修を望む声が多くあります。例年出される要望であり、関係者はそろそろ対応を考えねばならない時期にきていると認識しています。

### 発掘技術者研修「保存科学課程」

5月22日より6月6日の16日間にわたり、保存科学課程の研修をおこないました。参加者は、青森県から鹿児島県まで総勢13名です。保存処理の担当に抜擢された方、日頃の発掘調査業務に保存科学の知識を生かしたい方、保存科学全般について概略を学びたい方など、参加の動機は様々です。

研修内容は、保存科学の基礎から実際の材質・構造調査、保存処理、保管環境、現場における応急処置を含むフィールドワークです。この現地実習は平城宮跡発掘調査部の協力を得て、興福寺中金堂の発掘調査現場においておこなうことができました。また、保存科学における写真記録の重要性を理解して



発掘現場での実習風景

もらうために、写真室の協力を得て、写真撮影実習も併せておこないました。

2週間という限られた短い期間の中では、取り扱う内容が多岐にわたることから、スケジュール的にもかなりハードな面があります。しかし、保存科学についての講義・実習を一通り体験することで、発掘現場での応急処置や遺物の取り上げ方、保存処理の概要について理解が深まり、基本的な技術の習得がなされたものと思われます。研修生からは、発掘調査における保存科学の果たす役割や保存処理の重要性に対して認識が新たになった、これまで手を出せないでいた遺物の保存処理を自前でおこなう、あるいは自前でできなくても外注する際の留意点を整理し、仕様書を作成することに大きな一歩を踏み出

せたとの声が聞かれました。本研修は一応の成果をあげることができたものと思われます。

研修終了後、各々の任地に戻った研修生からは、遺物・遺構の保存について、それぞれが抱える問題に関する問い合わせを受けたりしています。また、研修生間の情報交換も頻繁におこなわれているようです。研修生が、それぞれ自分のできることから動き出している状況を見て、本研修を担当した者としての安堵と喜びを感じている次第です。

(埋蔵文化財センター)

### 博物館実習生の受け入れ

昨年度からおこなっている博物館実習生の受け入れも2年目をむかえました。今年度は9月3日（月）から7日（金）までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。



博物館実習風景

実習生はそれぞれ奈良女子大学から2名、帝塚山大学から4名、滋賀県立大学と広島大学から各1名の計8名と昨年度の5名に比べると、少し増加しています。徐々にではありますが、当館が博物館実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されつつあるのでしょう。

実習は、展示品貸借の実務、展覧会の実施について、博物館における展示解説、展示解説とマルチメディア、建築史概説と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品貸借の実務」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調